

唐丹町の考古学

釜石 森 一 欽



呼び、遺物が散布している地点や、住居跡が確認された地点を「埋蔵文化財包蔵地」と呼びます。

今回から、この考古学分野から唐丹町の歴史を紹介していきたいと思えます。

2. 唐丹町の遺跡の概要

釜石市内には現在のところ約二百七十ヶ所の遺跡が確認されており、このうち唐丹町では、四十四遺跡確認されており、縄文時代の四十一遺跡と一番多く、弥生時代が一遺跡、古代（奈良〜平安時代）が一遺跡、中世（鎌倉〜室町時代）が三遺跡、近世（江戸時代）が三遺跡となります（時代が重複している遺跡もあるため総計とあっておりませ

1. はじめに
地中に埋蔵されている先人の痕跡を発掘し、当時の生活を解明していく学問を考古学といいます。考古学で扱う資料のうち土器や石器などの動産を「遺物」といい、住居跡や、落とし穴、遺跡などを「遺構」、それらを総括した生活空間を「遺跡」と呼んでおります。

なお、文化財保護法においては、遺物や遺構、遺跡を総称し、「埋蔵文化財」と

ん。

遺跡の種類は、発掘調査がほとんど実施されていないことから、ほとんどが、遺物が散布しているとした把握できませんが、測量の碑の西側の山笹沢とスギノコブ沢によって形成された

台地上に立地する本郷遺跡や、大石の東側の高台にある屋形遺跡などでは縄文時代各時期の土器が多量に採集されていることから比較的大きな集落があったと想定できます。

このほかに、中世においては城館跡が確認されています。城館というと大阪城や名古屋城のような立派な天守閣のある城を想像しますが、唐丹町にあったものは、交通の要所に置かれ

た山城で、建物としては、民家とほぼ同じような構造だと考えられます。また、近世においては、物見山見張場のように沿岸警備のための施設跡や、葛西昌丕の隠居屋敷である奇巖亭、石塚峠の七里塚などがあります。

3. 唐丹町の考古学史

明治二十六年刊行の『東京人類学雑誌』第九卷九十一号に旧制第二高等学校生で東京人類学会の会員であった嶋村孝三郎氏が寄稿した「岩手縣下の古墳及び石器時代の遺跡」のなかに、唐丹町（当時は気仙郡唐丹村）で石鏡が採集できる所があるが、釜石製鐵所が盛んな頃（時代的に官営の頃か？）に外国人が採集して持って

いってしまったという内容が書かれています（嶋村（一八九三））。ここに書かれている採集地点は、本郷遺跡であると推察されます。なお、この論文は、岩手県内初の遺跡地名表で、釜石市における埋蔵文化財に関する最初の記事となります。

その後、岩手県教育委員会の中世城館の分布調査で、伝城、千葉館、迎館の3つの館が確認され（岩手県教育委員会（一九八六））や釜石市文化財保護審議会委員の三留孝氏の精力的な分布調査によって現在の把握状況となっております。

現在、釜石市教育委員会では、遺跡の詳細分布調査を行っています。唐丹町に關してはこれから調査を行うという段階ですが、他の地区の遺跡の傾向などを鑑みて、縄文時代に関しては貝塚、古代以降に関しては城館跡や、集落跡、製鉄関連遺跡などが期待されます。

次回からは、唐丹町の各遺跡を紹介していきます。